

ベルベットの毛並方向による被服構成上の諸問題 (1)

—試料に対する性能測定—

文化女大家政 ○千葉悦子 長谷川純子 小川 瞳

目的 ベルベットは添毛織物の1種であり、縫いすれを起しやすく縫い目を美しく表現することがむづかしい布地とされている。また、従来からベルベットは深みのある美しい光沢を効果付けるために布の扱いには逆毛方向裁ちが望ましいとされてきたが、最近の多様化したベルベットは、毛並方向を視覚だけでとらえることが困難になってきたと思われる。そこで、ベルベットの毛並方向の違いから生じられると思われる縫製上の諸問題、およびシルエットの差異について着眼し、本研究をすすめることにした。今回は、第1報としてまずベルベット地の特性を知る上で必要な布地の性能測定を行ない検討を試みた。

方法 試料布は、国産ベルベットで素材が異なるもの、また表面加工の有無なども考慮して6種の布地を選じた。1)硬軟性では45カンテレーバ法とハートルーフ法、2)ドレープ性、3)通気性、4)圧縮性と圧縮弾性、5)伸長弾性、などの実験を行ない考察した。

結果 ベルベットは他の布地と異なり地組織のみで構成されている織物ではなく、地組織にパイル糸が織りこまれているという特徴がある。このパイル糸により毛並方向を生じ、硬軟性では逆毛方向が硬く、通気性では地組織の糸密度に加えてパイル糸の太さや、織りこまれ方により影響されるが通気性が小の布地であることも証明された。圧縮性や圧縮弾性についても、地組織のみに加圧されるのではなくパイル糸にも加圧されるため、表面加工の有無、加工の方法、パイル糸の太さやパイル糸の織りこまれ方がVパイルであるか、Wパイルであるかによっても差異が著しく生じてくることがわかった。このようにベルベットは、パイル糸による影響が多大であることを改めて確認することができた。